

「通商・巡礼・亡命：17世紀～20世紀初頭の中央ユーラシアにおける超境界活動」

2016年3月12日（土）

早稲田大学文学学術院

1877年以降のカルムイク人仏教徒
—国外聖地巡礼の復活とその影響について—

井上岳彦¹

1 問題の所在

1-1 東遷（1771年）後のヴォルガ・ステップ

- ・行政 アストラハン県（国有財産省管轄）：114,911人（1868年）
ドン軍州（陸軍省管轄）：26,136人（1871年）
その他（オレンブルグ・コサック、テレク・コサックなど）
- ・社会 アストラハン県：ロシアの身分制度に各社会層を編入しつつ、1892年まで旧支配構造をある程度維持 例）ホショート・ノヨン→「公」（Князь, Duke）
ドン軍州：コサック身分に編入、旧支配層（ノヨン・ザイサン）は「不在」
- ・経済 牧地縮小や雪害・旱魃などによる家畜頭数の一時的減少～平民の貧困化、漁業労働者・製塩労働者の増加
- ・信仰 正教会を参考に教団の構造を再編成し、公認資格制度や定員規定などによって専任僧侶職に国家勤務を義務付ける
ジューンガルの滅亡（1755年）・ラサ巡礼の停止（1755年、シベリア経由）を経て、東遷（1771年）によって、ヴォルガ・ステップとチベットの関係は途切れた

1-2 本報告の目的

・どのようにカルムイク人²は「チベット仏教世界」[石濱 2001]に再び姿を現したのか、国外聖地巡礼の再開の過程を検討することで明らかにし、その影響について考察する

1-3 先行研究

・ブリヤート人高僧アグヴァン・ドルジエフ（1853-1938）によるカルムイク・ステップ訪問（1898年春）を重視する立場 [Snelling 1992; Schimmelpenninck van der Oye 2001; Andreyev 2003; 棚瀬 2009 など]

～これはもともと。訪問を受けたカルムイク人の大熱狂～「再包摂」へ

～ドルジエフによるカルムイク・ステップ訪問のきっかけは？

¹ 北海道大学大学院文学研究科・専門研究員、2014年度博士（学術）取得。inouetkhk@gmail.com

² カルムイクはテュルク語由来の他称だったが、1716年2月16日付のアユカの手紙のように、ロシアに対して、トルグートもハリマグ（Xalimag）を名乗るようになった。[НАРК. Ф. И-36. Оп. 1. Д. 4. Л. 52.]

2 周縁からはじまる宗教文化運動

2-1 ドルジエフ招聘の背景

- ・農業国有財産大臣への秘密報告（1898年4月25日）

ドルジエフのカルムイク・ステップ訪問理由：チベットで知り合った「バクシ」の招聘で、彼に会いカルムイク人僧侶の生活を知るため [НАРК. Ф. 9. Оп. 2. Д. 77. Л. 1-8об]
～この「バクシ」は誰か？

1755年にカルムイク人の国外聖地巡礼はいったん途絶

～いつからカルムイク人はふたたびラサに行くようになったのか？

2-2 ドン・カルムイク人

- ・ソ連カルムイク民族史観で周縁に追いやられていたドン・カルムイク人
アラシュ・ボルマンシノフ [Bormanshinov 1991; 1992; 1997]

キム・ショヴノフ [Шовунов 1992]

～不明な部分が多かったドン・カルムイク人の歴史が次第に明らかに³

- ・『ドン州通報』（1878年10月18日）

1877年に、4人のドン・カルムイク人僧侶がチベットへの巡礼を開始

しかしキャフタの国境事務官が外国旅行用パスポートの発行を拒否

僧侶はザバイカルでインドボダイジュの数珠を購入し、帰郷

戻って、数珠を1連100ルーブルで販売すると、郷里の僧侶たちが殺到

翌1878年、4人のうちの1人の僧侶ダムボ・ウリヤノフ（1844-1913）がふたたび巡礼に挑戦 [ДОВ 1878] ～イフ・フレーで4年間修行

⇒この知らせは隣接するアストラハン県のカルムイク人（ヴォルガ・カルムイク人）にも伝わる

～ヴォルガ・カルムイク人もイフ・フレーへの巡礼を開始 [Позднеев 1896: 563-564]

⇒さらに1892年、ヴォルガ・カルムイク人僧侶バーザー・メンケジュエフ（1846-1903）がカルムイク人として、約140年ぶりにラサに到着⁴

～このメンケジュエフこそがドルジエフがラサで知り合った「バクシ」

2-3 国外聖地巡礼再開の背景

～なぜドン・カルムイク人から始まったのか？

³ ロストフ州国立公文書館所蔵のカルムイク局の史料は近年徐々に公開されつつあるが、散逸が著しい。荒井幸康氏は、こうした研究状況の中で、早くからドン・カルムイク（ブザウ）人に関する研究の重要性を指摘してきた。[荒井 2003]

⁴ メンケジュエフは、「小デルベト郷（マロデルベテフスキー・ウルス、バガ・デルベト・ノトグ）」の最後の領主（владелец）で、のちの第1回ドゥーマ議員ツェレン＝ダヴィド・トゥンドウトフ（1860—1907）によって派遣された。[Сказания 1897]

・経済的成功

軍馬の飼育能力を高く買われ、牧夫勤務という特別なコサック勤務形態が誕生
人口1人あたりの馬生産数で、ロシア帝国第1位に(1870年代) [Шовунов 1992: 180-193]

・軍との信頼関係

ヴラジーミル・ブロネフスキイ (1784-1835) : ドン軍の陸軍少将で歴史家

「彼らは今やロシア帝国の(カザン・タタールを除く)異族人臣民の中で最も忠実で有用」 [Броневский 1834: 91]

バクシャ・アルカド・チュバノフ⁵ :

ニコライ・ニコラエヴィチ大公(スタルシー)(アレクサンドル2世の異母弟、1831-1891)
と個人的な親交。自身のチベット巡礼を希望するが願いは叶わず。その代わり、1884年にチベット大蔵経を贈呈される [Bormanshinov 1997]

～ニコライ・プルジェヴァリスキー (1839-1888) の中央アジア探検など、陸軍内の情報を容易に入手か

・その他

正教徒のパレスチナ巡礼やムスリムのハッジの影響(拠点としてのオデッサ) [Житенёв 2012; Брокгауз 1897; Brower 1996]

クリミア戦争後における中央アジア・東アジアへ戦略的転換 [Marshall 2006]

シベリアにおける測量・製図など空間的把握の進展 [ПСЗ-11: Т. 46. № 49338; Т. 46. 50183a; Т. 48. № 5233; Т. 53. № 59020.]

1850年代～60年代のキャフタ貿易体制の変容 [Грум-Гржимайло 1896:118; 吉田 1974]

中国・モンゴリア旅行者の旅券発行の簡素化(1874) [ГАИО. Ф. 24, Оп. 11/3, Д. 76.]

旅券のモンゴル語翻訳所持の義務化(1877) [ГАИО. Ф. 24, Оп. 11/2, Д. 117.]

バイカル・キャフタ間商業路の整備(1871) [ПСЗ-II: Т. 46. № 49717]

⇒以上の複合的な背景があり、「チベット仏教世界」の「周縁内周縁」ともいうべきドン・カルムイク人から国外巡礼運動は開始され、それが隣接するヴォルガ・カルムイク人にも波及。ドルジエフのヴォルガ・ステップ訪問は、カルムイク人という敬虔な仏教徒の存在を「再発見」する過程だった

(cf. スーフィー教団の社会文化的影響の特徴と類似 [Reichmuth 1998])

3 国外聖地巡礼開始の影響

3-1 ヴォルガ・ステップをめざす人々

⁵ 1873年にドン・カルムイク人の教団の長である「バクシャ」職に就任。1877年に最初に巡礼を試みた4人の僧侶のひとりロマン・マンジコフの甥にあたる。

例 1) アグヴァン・ドルジエフ

1898 年春、大熱狂に包まれ、大量の寄進を受ける。地方当局は「宗教的搾取」と位置づけ追い出しを図るが、現場の地方役人はあまりの熱狂ぶりに恐れをなし、ドルジエフの移動を妨げず。1902 年にも訪問 [НАРК. Ф. 9. Оп. 2. Д. 77. Л. 1-32.]

例 2) 「大清臣民」のモンゴル人僧侶 (1903 年 4 月)

請願：コーカサスの鉱泉でのリウマチ治療に行く途中で、カルムイク・ステップを訪問させてほしい～許可 [НАРК. Ф. 9. Оп. 2. Д. 77. Л. 33-35.]

例 3) 「大清臣民」のチベット人僧侶 (1903 年 4 月)

カルムイク草原を訪問、蠟燭や仏像など販売し帰った [НАРК. Ф. 9. Оп. 2. Д. 77. Л. 42-44.]

例 4) ブリヤート人オチロフとバドマエフ

6 箱に詰められた仏像 (個数不明、総重量約 426kg) の搬送を試みる～不許可

[НАРК. Ф. 9. Оп. 2. Д. 77. Л. 45-58.]

3-2 チベットをめざす人々

・ オヴシエ・ノルズノフ (1874-?) : 3 度の旅行。帝立ロシア地理学協会に依頼されて、ラサの写真撮影 [Цыбиков 1919]

・ ドン・カルムイク人コサック将校ナラン・ウラノフと僧侶ダムボ・ウリヤノフらによるチベット秘密調査団 (1904 年 1 月～1906 年 4 月)

調査隊準備段階からの陸相アレクセイ・クロパトキン (1848-1925) や陸軍参謀本部の深い関与～帰国後に参謀本部に報告

経路・予算の決定⁶におけるロシア科学アカデミーや地理学協会の全面的協力⁷

・ バドマ・ボヴァエフなどの若い学僧、チベットに遊学 (～1920 年代後半まで続く)

～ヴォルガ・ドン双方のカルムイク教団における改革運動の高揚 [Дорджиева 2001]

3-3 山西商人と仏具訪問販売

・ 中国人の拘束・尋問に関する史料 (1914 年 7 月 30 日) :

ドイツがロシアに宣戦布告する直前、内務省はロシア国内にいる中国人がドイツ (と日本!) のスパイ活動をしているとして、すべての中国人を拘束・尋問を通達

例) 山西省出身の行商人夫版 : 駐黒龍江鐵路交渉総局発行の一年通行証を所持。シベリア鉄道を利用しカルムイク・ステップまで来て、仏像やタンカを大量に販売

[ГААО. Ф. 1. Оп. 2. Д. 1381.; Иноуэ 2015] [cf. 塩谷 2014]

⁶ バクーまで鉄道、カスピ海をクラスノヴォツクまで汽船で行き、中央アジア鉄道でタシュケントに入り、馬でホルゴスからグルジャへ、さらに青海湖をまわってラサに行くという新たな経路の開拓が決定された。

⁷ 例えば、仏教学者セルゲイ・オリデンプルグ (1863-1934) やフォードル・シェルバツコイ (1866-1942)、彼らの指導下で学んでいたブリヤート人学生バーザル・バラディイン (1878?-1937) やツイベン・ジャムツァラノー (1881-1942)、探検家ピョートル・コズロフ (1863-1935) など、様々な研究者がウラノフの計画立案に協力した。[АВ ИВР. Разряд III. Оп. 1. № 16/919]

まとめ

- ・ロシア帝国の支配を受容したカルムイク人は、チベット巡礼の停止によって約1世紀のあいだ「チベット仏教世界」の歴史から消えていた。この状況を転換させたのが、「周縁内周縁」と位置付けられるドン・カルムイク人社会の僧侶による巡礼再開運動だった。
- ・宗教拠点であるチベットが国際情勢のなかで危機を迎えていた時、カルムイク人仏教徒はロシアの帝國的野心に便乗しつつ、宗教的な渴望を満たした。
- ・巡礼の再開は宗教拠点との文化的交流を促進し、それらの影響は「チベット仏教世界」の枠を越えて波及した可能性をもつ。

<アーカイヴ史料>

АВ ИВР Архив востоковедов Института восточных рукописей (г. Санкт-Петербург)

ГААО Государственный архив Астраханской области (г. Астрахань)

ГАИО Государственный архив Иркутской области (г. Иркутск)

НАРК Национальный архив Республики Калмыкия (г. Элиста)

<公刊史料>

- Брокгауз (1897) Энциклопедический словарь – Брокгауз и Ефрон. Т. 44. СПб., 1897. С. 643-645.
- Броневский (1834) *Броневский В. Б.* История Донского Войска. Описание Донской земли и Кавказских минеральных вод. СПб.
- Грум-Гржимайло (1896) *Грум-Гржимайло Г. Е.* Чайная торговля в России // *Ковалевский В. И.* Производительные силы России. Краткая характеристика различных отраслей труда – соответственно классификации выставки. С.-Петербург, Типографии А. Лейферта, Исидора Гольдберга, «Экономическая». 1896. Отд. IX. С. 114-126.
- ДОВ (1878) Буддийские пилигримы // Донские областные ведомости (г. Новочеркасск) №81. 18. 10. 1878. С. 3 (Неофициальная часть).
- Позднеев (1898) *Позднеев А. М.* Монголия и монголы. Результаты поездки в Монголию, исполненной в 1892-1893 гг. А Позднеевым. Том 1. Дневник и маршрут 1892 года. СПб.: Издание Императорского русского географического общества, 1896.
- ПСЗ-II Полное собрание законов Российской империи. Собрание Второе. 12 декабря 1825 – 28 февраля 1881 гг.: В 55т. СПб.: Тип. II Отделения Собственной Его Императорского Величества Канцелярии, 1830-1885.

- Сказание (1897) Сказание о хождении в Тибетскую страну Мало-Дörбötского Вāза-бакши. Калмыцкий текст, с переводом и примечаниями, составленными А. М. Позднеевым. СПб.: Издание факультета восточных языков Императорского С.-Петербургского университета ко дню открытия XI международного съезда ориенталистов в Париже, 1897.
- Цыбиков (1919) *Цыбиков Г. Ц.* Буддист-паломник и святынь Тибета. Избранные труды в двух томах. Т. 2. / Р. П. Пубаев. от. ред. 2-е изд. Новосибирск, 1991.
- <二次文献>
- Andreyev (2003) Alexandre I. Andreyev, *Soviet Russia and Tibet: the debacle of secret diplomacy, 1918-1930s* (Leiden: Brill, 2003).
- Bormanshinov (1991) Arash Bormashinov, *The Lamas of the Kalmyk people: the Don Kalmyk Lamas*. Bloomington, Indiana: Research Institute of Inner Asia Studies.
- Bormanshinov (1992) Arash Bormanshinov, "A Secret Kalmyk Mission to Tibet in 1904," *Central Asiatic Journal* 36/ 3-4 (1992), pp. 161-187.
- Bormanshinov (1998) Arash Bormanshinov, "Kalmyk Pilgrims to Tibet and Mongolia", *Central Asiatic Journal* 42/ 1 (1998), pp. 1-23.
- Brower (1996) Daniel Brower, "Russian Roads to Mecca: Religious Tolerance and Muslim Pilgrimage in the Russian Empire," *Slavic Review* 55, no. 3 (Fall 1996), pp. 567-584.
- Дорджиева (2001) *Дорджиева Г. Ш.* Буддийская церковь в Калмыкии в конце XIX – первой половине XX века. М.: Институт российской истории РАН, 2001.
- Иноуэ (2015) *Иноуэ Т.* О новых документах по связям калмыцкого духовенства с китайскими торговцами в начале XX в.. // *Н. Ч. Очирова*, сост., Монголоведение в начале XXI века: современное состояние и перспективы развития. Элиста: КИГИ РАН, 2015. С. 149-150.
- Marshall (2006) Alex Marshall, *The Russian General Staff and Asia, 1800-1917* (London: Routledge, 2006).
- Reichmuth (1998) Stefan Reichmuth, "The Interplay of Local Developments and Transnational Relations in the Islamic World: Perceptions and Perspectives," in Anke von Kügelgen, Michael Kemper and Allen J. Frank, eds., *Inter-regional and Ethnic Relations* (Berlin: Schwarz, 1998), pp. 5-38.
- Schimmelpenninck van der Oye (2001) David Schimmelpenninck van der Oye, *Toward the rising sun: Russian ideologies of empire and the path to war with Japan* (DeKalb: Northern Illinois University Press, 2001).

- Snelling (1993) John Snelling, *Buddhism in Russia: the Story of Agvan Dorzhiev, Lhasa's Emissary to the Tzar* (Shaftesbury, Dorset: Element, 1993).
- Шовунов (1992) *Шовунов К. П.* Калмыки в составе российского казачества (вторая половина XVII-XIX вв.). Элиста: Союз казаков Калмыкии; Калмыцкий институт общественных наук, 1992.
- Житенёв (2012) *Житенёв С. Ю.* Религиозное паломничество в христианстве, буддизме и мусульманстве: социокультурные, коммуникационные и цивилизационные аспекты. М.: Издательство «Индрик», 2012.
- 荒井幸康 (2003) 荒井幸康「書評 アレクセーエヴァ著『グラッベフスカヤ・コサック村 (17世紀～1943年12月)』Алексеева, П. Э., Станица Граббевская (17 век- декабрь 1943)」『日本モンゴル学会紀要』33号、2003年、79-82頁。
- 石濱 (2001) 石濱裕美子『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店、2001年。
- 塩谷 (2014) 塩谷昌史『ロシア綿業発展の契機ーロシア更紗とアジア商人ー』知泉書館、2014年。
- 棚瀬 (2009) 棚瀬慈郎『ダライラマの外交官ドルジーエフ：チベット仏教世界の20世紀』岩波書店、2009年。
- 吉田 (1974) 吉田金一『近代露清関係史』近藤出版社、1974年。